様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２２８８

研究課題名（和文）イングランドの内乱期と共和制下における民衆の祝祭と国王表象

研究課題名（英文）Poetic Representations of the Stuart Kings and of Popular Festivals during the English Civil Wars and through the Interregnum in England

研究代表者
笹川　渉（SASAKAWA, WATARU）

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：１０５５２３１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：以下の三点について成果を報告することができた。(1)王党派は国王をキリストに重ねることで、国王を受難や復活の救世主として賛美し、様々な祝祭を利用して聖書のキリスト像を17世紀イングランドの歴史に合わせた形で提示した。(2)本来立場を異にする王党派とランターズであるが、両者とも救世主を求めていた点で共通点がある。また、クリスマスの享楽に表現されるように、王党派は民衆の中で反政府を主張する騒動を起こしていたランターズとして時に見なされていたことを確認した。(3)王党派は詩の雑録を通じて、時に弾圧された民衆の祝祭を失われた宮廷の祝祭や娯楽に代わるものとして表現し、議会派に対する抵抗手段としていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、弾圧されていた民衆の祝祭という観点から、従来文学史的に看過されがちな内乱期から1650年代のイギリス文学についての特徴を論じることで、民衆の祝祭を利用して国王の支持を取り戻そうとした王党派の存在を浮き彫りしたことが学術的意義である。その中で、社会改革を目指したランターズは弾圧された民衆の祝祭を利用し、王党派は詩の雑録という議会派に対する抵抗手段で自らの祝祭を描き出した。内乱期と共和制下の王党派の文学に対する新たな視座を提供することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research project reports three major findings: first, royalist poets praised Charles I and II for their suffering a Christ-like Passion to restore England from the Cromwellian government and the image of Christ as a king was profoundly associated with popular and courtly festivals and with seventeenth century politics; second, certain historical documents evidence that the Ranters may be identified with royalists in the luxuriousness of their lifestyles and some examples of their Christmas feasts evince that the inherently incompatible groups of royalists and Ranters both hoped for the arrival of their savior in their own ways; and finally, the miscellanies of royalist poetry represented popular festivals that served to replace lost courtly festivities and merriment.

研究分野：初期近代イギリス文学

キーワード：イギリス詩　初期近代　王党派　祝祭　ミセラニー

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、国王不在の期間に王党派が生前に娯楽を奨励していたチャールズ一世をどのように民衆の王として提示し、民衆の支持を得ようとしていたかをさぐるものである。1640 年代から 50 年代のイングランドで、ピューリタンが構成する議会派は道徳的な戒律を重んじ、土地の祭り等で繰り広げられる娯楽を民衆に対して禁止していた。例えば、1640 年代半ばに、ジェームズ一世とチャールズ二世によって奨励された「主の日（日曜日）」の娯楽や、地方の祭りであるWakeでの騒動､聖霊降臨の祭りであるWhitsunの享楽は不道徳であるとされ弾圧されていた。この経緯と文学の関係は、スチュアート朝初期から中期にかけての民衆の休日や祝日の政治性を論じた研究、Leah S. Marcus, *The Politics of Mirth* (1986)や 近年でも Jerome de Groot, *Royalist Identities* (2004), Alistair Dougall, *The Devil's Book* (2011), Jennifer C. Vaught, *Carnival and Literature in Early Modern England* (2012)等で論じられている。

しかし､「主の日」に娯楽を奨励したジェームズ一世およびチャールズ一世の『娯楽の書』についての研究はこれまでに多くなされてきたものの、国内外とも従前の研究で不十分と思われる点は、文学が内乱期を中心とした祝祭をどのように表象したのかという議論が少ないことである。スチュアート朝初期から中期にかけての民衆の休日や祝日の政治性を論じた研究はこれまでもなされている。しかし、これらの研究は個別の作家を中心に論じている点（Marcus)、スチュワート初期が論考の中心である点（Dougall, Vaught）あるいは 1649 年のチャールズ一世の処刑までが論点となっている点（de Groot）で、さらなる研究の余地があると考えられる。

２．研究の目的

本研究は内乱期と共和制下に書かれた文学作品を中心に取り上げ、政治パンフレットを参照しながら、民衆の祭りを通じて不在の王がどのように表象されているのかを明らかにするものである。チャールズ一世は 1637 年に『娯楽の書』を再版したことで、民衆の娯楽と祝祭を擁護する国王という姿を明確にした。しかし、ピューリタンが議会で中枢を占めるようになると、娯楽や祝祭が弾圧されるに至り、国王を支持する王党派は、王の座を追われ処刑されたチャールズ一世、大陸諸国を放浪していたチャールズ二世を娯楽の王として強調し、議会派に対する抵抗の手段として祝祭と国王を利用した。議会派、王党派の両陣営から国王のイメージは生産されてきた。そこで本研究では、文学作品を中心とした文献に国王がどのように表象されているかを注目し、以下の三つの観点から研究を進めた。

（１）内乱期のキリスト表象と国王

スチュアート朝において、救世主キリストは、イングランドを救うために降臨したチャールズ一世と二世として表象された。そこで、1640 年代から 50 年代の作家たちは、内乱期以前の国王の治世を懐古的にふり返り、王党派と議会派による内乱が繰り広げられている間、また、チャールズ一世処刑後の国王不在の期間に、国王が救世主キリストとしてどのように描かれているのかを、クリスマスやそれ以外の祝祭を言祝ぐ文献に認める。

（２）ランターズ（喧騒派）と民衆の祝祭

ピューリタンの道徳規律に反対する形で、祝祭と騒動を好んだランターズについては、これまで千年王国思想と結びついた救済観を中心にした論考が多い。しかし、議会派からは弾圧の対象であったランターズの享楽的な側面が、同様に弾圧されていた民衆の祝祭とどのように関わっていたかを文学テクストに認めることについては議論の余地がある。ランターズが行なった騒動と民衆との接点を見出すことで、祝祭の政治性に新たな知見を提供する。

（３）宮廷の祝祭に代わるものとしての民衆の祭り

王党派の作家は民衆の祭りを通じて不在の王侯をその観客として想定している例が見られる。つまり、内乱期以前に宮廷で行われた壮麗な仮面劇や祝祭日の出し物は、内乱期に入るとその場所を失ったが、民衆の祭りがかつての宮廷の祝祭にかわるものとして機能していることがうかがえる。本研究では、文学作品を中心とした一次資料を通じて、失われた宮廷の祝祭がどのように描かれ、民衆の祭りを利用しているのかを追うことで、内乱期と共和制下における祝祭の政治性を考察する。

３．研究の方法

本研究は各年度とも、国内外の図書館や研究機関で一次資料と二次資料の調査と文献収集を行うことで進めた。一次資料については印刷物や電子資料として確認できないものがあるため、海外の研究機関で所蔵されている資料も用いて研究を行った。そこで、研究目的に挙げた（１）～（３）を明らかにするために、それぞれについて次の内容を中心に進めた。

（１）「内乱期のキリスト表象と国王」は、研究代表者が平成 26 年度まで助成を受けた「1620 年代から 50 年代を中心としたイングランドのイエス生誕詩の政治的多様性」における研究をふまえ、クリスマス以外の祝祭と、そこで描かれる国王の表象を明らかにした。 Lois Potter, *Secret Rites and Secret Writing* (1988) や Thomas N. Corns, ed., *The Royal Image: Representations of Charles I* (1999) では、文学作品に見られるチャールズ一世の表象が詳

細に論じられており、チャールズ一世がキリストとして描かれている例が指摘され、チャールズ一世が受難のキリストとして提示されている例を見ることができる。しかし、王政復古に際しチャールズ二世が復活したキリストとして提示される例を除き、内乱期と共和政下におけるキリスト表象と祝祭の結びつきの多様性については十分に検証されているとは言い難いため、この点をさらに考察した。

（２）内乱期と共和制下における民衆の祝祭と王党派の言説についての多様な側面を明らかにするために、ランターズと民衆の祝祭との関わりに論点を絞り、その特質と文学的における言及を考察することを行った。ランターズについてはこれまで文学、歴史、政治、宗教といった分野で多く議論され言及されてきたが、民衆の祝祭との関連については十分に議論されているとは言い難い。Christopher Hill が先行研究の J. C. Davis に反論する形で、さまざまな文献を提示しランターズの存在を論証して以来、近年の文学研究で Norman N. Corns が *A Companion to Stuart Britain* (2003) の中の一章や、*A History of Seventeenth Century English Literature* (2014)等でランターズに言及してきたが、祝祭との関係を議論した文学研究は認められない。本研究課題は、ランターズがどのように祝祭との接点を持ち、彼らが起こす騒動がどのように文献に描かれているのかを追究することに焦点を当てた。一次資料については、Nigel Smith, ed., *A Collection of Ranter Writings* (2014) を主に参照することで研究を進めた。

（３）民衆の祝祭が宮廷の祝祭にかわるものとして利用されていることを明らかにした。この点で、イングランド内乱期における民衆の祭りは現実世界の転倒であるものの、そこでは現実とは対称的な王が表象されるという支配者を強固するための祝祭が展開されることになる。王党派の作家は、チャールズ一世が『娯楽の書』で民衆の娯楽を奨励したことを喚起させながら、国王を民衆を守護する者として描いている。このような例は Robert Herrick や Martin Lluelyn の作品に見ることができ、Lluelyn が描く王党派の軍が駐留するオックスフォードでの祭りには、国王や将来のジェームズ二世であるヨーク公が観客としてその座を占めている。また、祝祭日をタイトルにした多くの作品は、その祝日が議会派によって蔑ろにされていることを描いた作品であり、議会派が反道徳的とする祝日の騒ぎを許容しない権力側と、祝日に行われる祭りを守ろうとする王党派との闘争を認めることができる。王党派と議会派との暦をめぐる争いは、前述の Marcus、de Groot、Vaught、Dougall らにより、『娯楽の書』の再版によって引き起こされた「主の日」をめぐる論争が中心に議論されているが、本研究課題は内乱期と共和制下における民衆の祝祭に注目し、王党派の作家による民衆の祝祭の記述と国王の表象に焦点化することで本論の独自性を目指した。

４．研究成果

上記「研究の目的」と「研究の方法」で示した（１）～（３）について、以下の成果をあげることができた。

（１）内乱期以前と王政復古の間に王党派の文献を読解することで、キリストに国王が重ねられた例を多数認めることができた。例えば、1655 年に出版された Daniel Cudmore のキリストの誕生と受難を題材にとった詩集 *Euchodia* は、聖書の一節を引用しながらそのテーマについての詩が続くという体裁であるが、内乱という同時代の史実を意識していることが明らかな描写を散見できる。また、国王不在の内乱期におけるキリスト生誕への言及は、国王を直接言及することなく国王再臨を待望することを表明した国王支持者たちのレトリックであることを確認することができた。この点に関する調査の一部について、研究代表者が所属する研究会で、「ブリトマートの変容―スペンサーの『妖精の女王』におけるベローナとミネルウァ」と「幻想の祝祭―1640 年代から 50 年代前半における王党派の国王表象」の題目で口頭発表による報告を行った。

また、本研究課題遂行のために収集した資料を使用し、研究代表者が所属する十七世紀英文学会の論集に「『神意にかなわぬ』ソロモン王――『失楽園』における〈虚構ではない〉チャールズ二世の表象」の論文を発表した。本論では、王政復古期だけではなく、内乱期以前から共和制下においても、国王がソロモン王として表象されていたことを示すテクストは、国王を言祝ぐ祝祭の一面であったことを示した。キリストと同様、ソロモン王の表象はスチュアート朝の王に対して繰り返し付与されてきたものであったが、チャールズ一世が処刑された直後に出版された聖職者トマス・ベイリーによる国王をソロモン王と賞賛した著作は、1650 年代にも再版されている。このことはソロモン王としての国王表象が大衆にも広く受け入れられていた証拠であり、キリストと並んで王政復古以降の国王表象の受容として認めることができる。

（２）初期近代印刷本のデータベースである Early English Books Online (EEBO)で、1651 年出版の *Mercurius Politicus* の記事にあたり、王党派とランターズの関連性が示唆されている記事の分析を行った結果、一部ではランターズが王党派として見なされていたことを確認した。また、内乱期の匿名のパンフレット“The arraignment and tryall with a declaration of the

Ranters”(1650)や、1660年の匿名のパンフレット、“Englands joy in a lawful triumph.”(1660)を見ることで、地上の楽園の到来を待望したランターズが、王党派的な色彩を帯びた民衆の祝祭と動きを共にしていた可能性が垣間見られることを確認できた。これに加え、ランターズが1650年から1651年にかけて活動していた様子を記録した文献と、王党派の詩集や歌集が同じ時期に多く出版されたことに着目し、王党派とランターズに言及した Adam Smyth, *Profit and Delight* 等の論考を参照しながら、「共和政府樹立後の歓楽――王党派とランターズ」のタイトルで、研究代表者が所属する研究会で口頭発表をした。

（３）宮廷の祝祭に代わるものとして民衆の祭りが一定程度機能していたことを提示した。王党派の詩人たちは、Wakeなどの民衆の祭りを描きながら、国王を賛美するための機会として用いていた。内乱期以前、そして内乱期中に出版された王党派の詩集が、共和制下でも再版されていたことから、共和制下で再生産されるテクストを通じて王党派は国王の帰還を祈願し、政治的主張を行っていたと考えられる。例えば、国王処刑後に出版された *Recreation for Ingenious Head-peeces* (1650)は、以前の王党派の詩のミセラニーを再版したものであるが、それまでに書かれていなかった国王擁護の立場を表明するページを付加するなどの編集を通じて、王党派による政治的主張が見られる。このような例を検証し、国王不在の間に、王党派がテクストの再版により国王と祭りの関係に言及することで、国王をその庇護者という形で民衆に訴えていた可能性を考察した。

また、王党派は詩のミセラニーを通じて、共和政下において不在の国王の賛美を行っていたことを調査した。それはクリスマスといった、王党派が繰り返し行ってきた祝祭日に限定することなく、民衆の声を利用していたことを明らかにした。例えば、民衆に膾炙していたブロードサイド・バラッドを利用した国王賛美した作品を王党派の詩のミセラニーに加えることで、民衆の声を利用しながら王党派の主張を提示している例が見られる。このような例は、*Wit and Drollery* (1656)や *The mysteries of love & eloquence* (1658)などで見ることができる。従来の批評で主張されているように、1650年代に出版された王党派の詩集は、ピューリタンによる社会や政治への抵抗手段であることは間違いないが、王党派はこのような出版戦略を通じて民衆の声も取り込もうとしたことを指摘する必要がある。このような動向は、王党派による手稿の筆記にも伺うことができる。例えば、William StrodeによるChlorisをテーマにした作品は重ねて手稿に筆記された最も人気のある作品であることが指摘されているが、実は恋愛詩の枠組みを用いて王家への賛美が提示されており、さらに音楽という手段で国王の復帰を民衆に訴えていたと考えられる。この点については、British LibraryとFolger Shakespeare Libraryでの現地調査を通じて証拠を集めることができた。このことについて研究代表者は研究会で、「『失楽園』の「天上の想像力」と身体観」、および「王党派の詩集 *Wit and Drollery* (1656) をめぐって」の題目で研究成果を提示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計５件）

① 笹川 渉、王党派の詩集 *Wit and Drollery* (1656) をめぐって、オベロン会、2019
② 笹川 渉、『失楽園』の「天上の想像力」と身体観、オベロン会、2018
③ 笹川 渉、共和政府後の歓楽―王党派とランターズ、オベロン会、2017
④ 笹川 渉、幻想の祝祭―1640年代から50年代前半における王党派の国王表象、青山英文学会、2016
⑤ 笹川 渉、ブリトマートの変容―スペンサーの『妖精の女王』におけるベローナとミネルウァ、オベロン会、2016

〔図書〕（計１件）

① 笹川 渉 他、金星堂、17世紀の革命／革命の17世紀、2017、333頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
研究代表者のみの個人研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。